

世界哲学としての日本哲学——その可能性と問題点——

納 富 信 留

一 世界哲学のアイデア

「世界哲学 World Philosophy」という新たな研究プロジェクトが始まっている。これは既成の理念や分野ではなく、日本の哲学者たちがこれから議論していく場(プラットフォーム)であり、それを構築する運動である。世界哲学という視野から日本哲学を見た時、どのような可能性が見えてくるのかを考察したい。

まず、世界哲学とは、西洋哲学として理解されてきた「哲学 philosophy」を従来の枠組みから解放し、地域や文化や時代をまたぐ世界規模で哲学を再編する試みである。特定基準による画一化という弊害を避けるため「グローバル Global」という呼称は避ける。ここではまず、諸伝統の間での哲学・思想の比較が重要となる。世界哲学は発見概念であり、その視野から考えることで私たちが従事している哲学のあり方を見直し、ある

べき哲学を追求する場である。

世界哲学の試みでは「世界」という単一の枠組みへの統合や吸収ではなく、多元的で豊かな可能性の確保が重要となる。「世界」という概念にはいくつかの層があるが、地理・文化的には西欧と北米中心から脱却し、アフリカ、中南米、東南アジア、ネイティブ・アメリカンなど各地域や伝統を大切にし、他者との浸透関係や相互関与をつうじて新たな哲学の可能性を探っていく。それら異なる複数の視点から共通の哲学問題について考え方を突き合わせ、対話していく姿勢が必要である。それは哲学の新たな語り方への挑戦であり、そこで日本哲学の可能性を考え発信することが私たち日本の哲学者の役割であろう。

二 言語と翻訳の問題

比較思想学会第四六回大会のパネルディスカッション「世界

哲学をリードする日本哲学」では、張政遠氏、フェリペ・フェハリ氏、ロマン・パシユカ氏という三名の外国人日本哲学研究者からの報告を受けて、浮かび上がった問題を取り上げてコメントした。

最近まで必ずしも世界的な知名度が高くはなかった日本哲学が日本国外で理解・議論されるためには、他言語への翻訳が必要である（パシユカ氏によるルーマニアの状況報告）。日本哲学に関する書物・論文のテキスト提供は重要な基盤となるが、どの言語での哲学にも付きまとう翻訳の困難、とりわけ日本で培われた概念や思考法をどのように他言語に表現するかが課題となる。また、日本哲学を論じる言語が日本語であるべきか、各地の言語でもよいのか、あるいは共通語になりつつある英語なのかという問題が張氏から指摘された。世界哲学という包括的な場であっても、多文化を包括して一緒に論じようとするがゆえに英語を使わざるを得ないという問題が生じる。言語的にはむしろ多元性が失われつつあるが、これは日本語だけでなく他の言語圏の哲学にも共通する課題である。局所的には日本語と中国語の直接のやりとり（日本哲学会主催「日中哲学フォーラム」の基本方針）なども可能であるが、三カ国以上になると多言語間での翻訳がほぼ不可能となる。

自然科学 *natural sciences* とは異なり、自然言語と歴史文化に依拠する哲学の場合、他の言語への翻訳は困難であり作業は単純ではない。語彙や表現に共通基盤が欠如する状況で、世界

哲学が可能か、あるいは世界哲学における日本哲学が可能かは、基本的な問題である。

世界哲学が、世界の様々な哲学・思想を単に並べて見るといふものではなく、哲学の問題を立ててそれについて議論する共通の場である限り、これまで「哲学」の名の元で共通に用いられた西洋哲学の概念・用語、議論・問題、枠組みへの根本的な反省が必須となる。この反省がないと、日本哲学を論じているように見えて、実は西洋哲学の土俵で西洋哲学の概念を使って日本文化という素材を取り扱っているに過ぎなくなるからである。世界哲学としての日本哲学という課題は、日本語と他言語との間の翻訳をつうじて、新たな問題を提起し、問題の枠組みを創出することができるかどうかにかかっている。

三 日本哲学のポテンシャル

日本哲学という領域を世界哲学という枠組みで考える場合、何が見えてくるのか。

近代日本哲学が世界において評価されている現状を踏まえる（張氏報告）、そのポテンシャルティをより深く考える意義は大きい。明治以来の近代日本は、西洋哲学を咀嚼し翻訳をつうじて自らの思索を提示することに成功した。だが、近代日本哲学が直面したのは、主に「西洋近代」が囚われていた哲学の課題であった。一九世紀後半に西洋哲学は行き詰まりの状況にあり、主客の対立、認識の問題などについて、デカルトやロッ

ク以来の西洋近代の枠組みをどう乗り越えるかが強く意識されていた。西田幾多郎を代表とする近代日本哲学はその課題に答える試みを行ったが、その限りでは西洋哲学の土俵で問題が立てられていて西洋の側から評価されやすい。そこに含まれる一定の日本独特の思考法は、「日本独自」というエキゾチックな魅力(パシユカ氏報告)として、議論内容の妥当性という以外の要素で評価される傾向にもあった。

それでは、近代以前の日本哲学はどう扱われるべきか。少なくとも、日本哲学のポテンシャルを全体として総合的に考える必要がある。西洋哲学が導入される以前の日本哲学は「哲学」という理念が当てはまらない思索とされ(西周)、他方で、西洋哲学を基準とする限りで「我日本古より今に至る迄哲学無し」(中江兆民)と悲観される状況が生じていた。

世界哲学で近代以前も射程にいれて西洋哲学の枠組みを超える視野を、以下の五点で提示したい。

①「宗教」との重なり

仏教、儒教、道教、神道といった宗教の領域について、哲学から区別しない視野が求められる。そもそも「宗教 religion」というローマ以来の概念が特殊であり、経典・教祖・教義・教団というキリスト教・イスラームなどの枠組みは東アジアでは当てはまらない。

②「文芸」との重なり

西洋では哲学と対立的に扱われてきた文学・芸術の領域につ

いても、日本の哲学・精神史に含めて扱う必要がある。具体的には、和歌・俳句・歌論・能楽書・随筆・説話等がある。

③「道」というあり方

日本で「道」という語が付された修練や探求についても考察する必要がある。茶道・華道・香道・武士道・道徳などであるが、「柔道」が旧来の「柔術」から名称を変えたように、明治以降の形成という事情も考慮すべきであろう。

④「科学」との連携が希薄

西洋とは異なり、自然科学の研究が体系的に行われなかったことも特徴である。農学、薬草学、医学、兵法などでは大きな成果を残したが、それらは実用や職業の範囲に限られる傾向にあった。

⑤「学問」の枠組みへの違和感

西洋の学問・教育制度は、プラトンの学園アカデメイアやアリストテレスの学問から中世の大学を経て形成された。そこで整備されて近代日本に導入された専門分野や学問とは異なる東アジアでの学問営為が明確化されるべきであろう。

これらの五つの観点を導入することで、西洋的ではない「哲学」の枠組みを作り出す試みが必要である。

さらに、世界哲学の課題には現代の日本文化を再考することが含まれる。ここでは想定される考察領域を六つ挙げる。

①「文芸批評」の哲学における役割

②アニメ、映画、ファッションなどの「サブカルチャー」

- ③ 「和」の空間、食文化、生活
- ④ 伝統と最新のフュージョン、先端技術
- ⑤ やまとことば、多言語社会、新しい日本語
- ⑥ 経済、医療、環境、コミュニケーションなどで直面する問題

私たちが生きる現場から考えるポテンシャルを最大限に生かす日本哲学を目指すべきであろう。

四 日本哲学をどう捉えるか

日本哲学は従来の「東洋 East, Orient」という枠組みで論じられる傾向にある(フェハリー氏報告)。しかし、「西洋/東洋」という対比は、サイドのオリエンタリズム批判以降、きわめて問題含みとなっている。その一方で、井筒俊彦のように新たな「東洋」という理念を提出して「精神的東洋」を設定する提案もある。いずれにしても「東洋」の定義と慎重な扱いが必要であろう。

この区別の破綻は、具体的には、アフリカ・ロシア・中南米など「非西洋・非東洋」の文化で確認される。また、日本や中国などすべてを包括する「東洋」という一体性はなく、明治以後の日本の哲学を単純に「東洋/西洋」の選択で語ることもできない。個別に丁寧に関係を考察する必要がある。日本との関係では次の五つの観点がある。

① 日本と中国：漢字文化、道教、儒教など全面的

- ② 日本と韓国・日本への媒介、儒教、キリスト教
- ③ 日本とインド・仏教が主、他の側面
- ④ 日本と東南アジア、中央アジア、イスラーム圏
- ⑤ 日本とヨーロッパ、北米・明治から現代

むしろ、日本を世界から捉える目配り、つまり、他の文化・哲学との関わりを考慮すべきであろう。「日本哲学」という理念も、「日本」という地域で遂行された/日本人による/日本語でなされた/日本での営為を対象とする」といった異なる意味を担い、「日本」というアイデンティティも「地域・文化・民族・言語」などの意味が重なる。日本には中国文化、西洋哲学を受容した豊かな経験があり、翻訳をつうじて発展した日本語の豊かさの可能性がある。

他方で、「西洋 West」が単一の文化・伝統かという問題もある。私自身は、古代ギリシアという源泉に戻ってそこから「西洋」そのものを見直し解体する、日本からの視点を追求している。それは、西洋の特殊性を自覚し、そこから豊かな哲学の可能性を再発見する試みである。具体的には、古代ギリシア哲学が打ち出した「観照 *theoria*、普遍性 *katholon*、合理性 *logos*」の再検討を進めている。共同の議論をつうじて「世界哲学としての日本哲学」を探求していきたい。

(のうとみ・のぶる、西洋古代哲学、東京大学大学院教授)